ボイスドラマ「ロマンティーク・ショコラの贈り物」台本

和上京鈴

【登場人物】

コレット：ショコラトリー「Un Cygne（アン シーニュ）」の見習いショコラティエール。
　情緒豊かで好奇心旺盛。ミステリーオタク。節約が趣味。

ジャック：気難しい新人探偵。甘いものと人付き合いが苦手。怪盗ショコラを追っている。
　悪態を吐きつつも面倒見は良い。

リシャール：「Un Cygne」のオーナーショコラティエ。コレットの師匠。
　物腰柔らかで女性人気が高い。マイペース。

カリーネ：「Un Cygne」の常連客。からかい好き。
　大企業の社長夫人や国会議員の妻といった噂のある、謎に包まれた女性。

M・ファクティス：贋作オークションのオークショニア。つかみどころがなくミステリアス。
　（台本内では「ファクティス」表記）

オリヴィア：セルマン美術館の若き館長。前館長である父の跡を継いだばかり。
　一見丁寧だが強気な面も。

ナタリー：贋作オークションに出入りしている、小さなギャラリーのバイヤー兼鑑定士。
　気だるげで、物事を達観している。

2月上旬のパリ市街。

SE：列車の走る音、街の雑踏。コレットの駆け足。
　店のドアが勢いよく開かれ、ドアベルが鳴る

コレット「っ……間に合った！」

リシャール「ギリギリアウト、です」

コレット「わっ……リシャールさん、お早いですね」

リシャール「オーナーですから、当然です。
　それよりもコレット……最近遅刻が続いていますよ。
　いいかげん早起きできるようにならないと、いつまで経っても見習いのままです」

コレット「うう……朝はどうしても苦手で。
だって目覚まし時計鳴っても気づかないんですもん」

リシャール「(溜息) ……一人暮らしを始めて、もう半年経つんですよ。
ご実家から通っていた時より、通勤時間は短いはずなんですが」

コレット「……わたし、お母さんって凄いんだなあって思いました。
朝早いし、ご飯作ってくれるし、お洗濯もお掃除も午前中に済ませちゃうし……」

リシャール「話を逸らさない。
まあ、自立してみて、改めて親のありがたみがわかるものです。
……さて、今日はそんなコレットに、渡したいものがあります」

コレット「えっ、何ですか?」

リシャール「ふっふっふー、じゃんっ」

SE：瓶をテーブルの上に置く

コレット「これは……?」

リシャール「アーモンドプラリネです。ペーストにしてショコラと混ぜてみました。
朝食のパンにでもつけて食べてください」

コレット「わぁ、ありがとうございます！　リシャールさんのお手製だー！」

リシャール「喜んでもらえて何よりですが、ここではオーナーと呼ぶように、ね。
さ、裏で着替えてらっしゃい。
それから……従業員が店に入る時は裏口から、ですよ。
お客様がいらしたと勘違いしてしまいますからね」

コレット「あ、そうでした……気をつけます。じゃあ、準備してきますね」

リシャール「はい、いってらっしゃい」

コレットN「パリの街に並ぶ、お洒落なお店。
その中で、一際輝くショコラトリーがありました。
それが、わたしが働いているこの『Un Cygne（アン シーニュ）』。
オーナーショコラティエであるリシャールさんのもとに弟子入りしたわたしは、一人前のショコラティエールを目指して、日々修行に励んでいるのです」

コレットN「ボイスドラマ『ロマンティーク・ショコラの贈り物』」

ＳＥ：椅子から立ち上がる

カリーネ「ごちそうさまでした」

コレット「はーい。カリーネさん、新作いかがでした？」

カリーネ「ええ、美味しかったわ。オーナーの作るショコラは、やっぱり最高ね」

コレット「ですよね！　わたしも大好きです。だから弟子入りしたんですけど」

ＳＥ：足音

リシャール「おや、カリーネさん。本日もありがとうございます」

カリーネ「オーナー、ごきげんよう。今日は表に出てこないのかと思ったわ」

リシャール「売り場を任せてばかりいては、お客様とお話しする機会が減ってしまいますから」

カリーネ「まあ。相変わらず経営者の鏡ね」

リシャール「より美味しいショコラを作るためですよ。もちろん、お客様の笑顔のためにも」

カリーネ「上手だこと」

コレット「凄い……これが大人の会話」

カリーネ「そういえば、もうすぐバレンタインね。
恋人にショコラを贈る人も多いし、お店、忙しくなるんじゃない？」

リシャール「そうですね。
そこで、今年は将来有望な新人にも手伝ってもらおうと思いまして」

カリーネ「あら、コレットちゃんが？」

コレット「はい。もうわたし、すっごく嬉しくって！
頑張って皆さんに喜んでもらえるようなショコラにします！　絶対！」

カリーネ「ふふ、それは楽しみね」

リシャール「その前に、まずは基本的なことができるようにならないといけませんがね。
朝はちゃんと起きるとか、朝はちゃーんと起きるとか」

コレット「が、頑張ります……」

カリーネ「微笑ましいこと。
それじゃ、そろそろ私は失礼するわ。用事もあるし。二人ともありがとう」

リシャール「またお待ちしております」

コレット「ありがとうございました！」

ＳＥ：カリーネ、店を出ていく

リシャール「さて、コレット。次のショコラができたので、並べてくれますか？」

ＳＥ：トレイをテーブルに置く

コレット「はい。……リシャールさん、あの」

リシャール「なんでしょう？」

コレット「昨晩お渡しした、わたしの試作品……どうでした？」

リシャール「んー、そうですねぇ……前回より確実にレベルは上がっています」

コレット「それじゃあ……！」

リシャール「ですが、店に並べるにはまだまだです」

コレット「そうですか……あの、わたしのショコラって何が足りないんでしょう？」

リシャール「自分で食べてみてどうでした？」

コレット「うーん、口どけも風味も問題ないはずなんですけど……」

リシャール「……まあ、自分だけでは気づけないこともありますからね。
試しに、お客様に召し上がっていただいては？」

コレット「えっ、いいんですか？」

リシャール「見習いの試作であるということを説明すれば、大丈夫ですよ。
私がどうこう言うより、お客様からの率直な感想のほうが参考になると思いますしね」

コレット「ありがとうございます……！　カリーネさんに頼めば良かったなあ」

リシャール「用事があると仰っていましたからね。別の方に頼みましょう。
何かヒントが得られると良いですね」

コレット「はい！」

ＳＥ：ドア開く、ドアベル

コレット「あっ、いらっしゃいませー」

リシャール「いらっしゃいませ」

ＳＥ：足音

ジャック「……小さめのショコラを、九つほど詰めていただきたいのですが」

リシャール「はい。ご希望のお味や種類はございますか？」

ジャック「特にありません。すべてお任せします」

リシャール「でしたら、こちらのアソートボックスがお勧めになりますが」

ジャック「では、それで」

リシャール「かしこまりました」

コレット「……じーっ」

ジャック「っ……何だ、この妙な視線は」

ＳＥ：コレットが飛び出す

コレット「……あ、あの！　ショコラ、お一ついかがですか？」

ジャック「は？」

リシャール「コレット……」

コレット「お願いします！　私の作った試作品なんです！
食べていただけないでしょうか……？」

ジャック「……悪いが、僕は甘いものは苦手なんだ。
ここに来たのも、人に贈るためのショコラを買うためでね」

コレット「そうなんですか……。あの、どなたに贈るんです？」

ジャック「顔も知らない職場の経営者。ここのショコラが好きなんだそうだ。
間接的なパシりといったところだな」

コレット「まあ！　でしたら、新作のボンボンショコラを差し上げたら喜ばれると思いますよ！
ラ・フランスのパート・ド・フリュイを重ねたものと、フランボワーズのコンフィチュールを包んだ二種類がございます」

ジャック「何でもいい。僕が食べるわけじゃないからな」

コレット「えー……せっかくの贈り物なのに」

リシャール「コレット、無理を言わないの」

ジャック「――ん？」

コレット「どうかなさいました？」

ジャック「――この、絵は」

コレット「ああ、素敵ですよね！
私が来た時にはもうここに飾ってあったんですけど、オーナーのお気に入りで」

リシャール「コレット、手も動かしてくださいね」

コレット「あっ、はーい」

ジャック「……どういうことだ」

リシャール「それでは、こちらがアソートボックスと……先程この子が申し上げた新作を、
一つずつ添えておきました。これはおまけということで」

ジャック「え？」

コレット「リシャールさん……！」

リシャール「当店のショコラがお好きとのことでしたから、是非召し上がっていただきたくて。またいらしてくださいね。今度は、職場の方もご一緒に」

ジャック「……ありがとうございます。
……見習いくん」

コレット「はい」

ジャック「協力できなくて悪かったな」

コレット「い、いえ！　とんでもないです……！」

ジャック「それじゃ、失礼」

ＳＥ：ジャック、店を出る

コレット「……悪い人じゃないみたい」

リシャール「それにしてもコレット、見習いだってバレてましたね」

コレット「あっ……どうしてわかったんでしょう」

リシャール「まだまだ気が抜けているからですよ。……リボン、ほどけてます」

コレット「へっ？　……あ、ほんとだ」

リシャール「しっかりしてくださいね。
バレンタイン期間のショコラは貴女からの意見も取り入れたいんですから。
貴女の発想力、期待してますよ」

コレット「……はい、頑張ります！」

コレットＮ「それからしばらくして、あのお客さんはまたお店を訪ねてきました。
試作品を食べてくれる気になったのかと思いましたが、そういうわけではないようで……。
なぜか、わたしの連絡先を教えてくれと仰ったのです。

そして週末、わたしは彼に呼び出されて、お茶をご一緒することになりました」

喫茶店。

ＳＥ：店内ガヤ

コレットＮ「……なぜ、こんなことになってしまったんでしょう」

ジャック「食べないのか？」

コレット「い、いえ。いただきます」

ＳＥ：ナイフとフォークを置く

コレット「んー、美味しー！　ここのショコラガレット、一度食べてみたかったんです」

ジャック「それは良かった。これで君は、僕に協力する理由ができたわけだ」

コレット「……協力……？」

ジャック「僕は、こういった者でね」

ＳＥ：名刺を差し出す

コレット「ジャック・バスティード……探偵、さん？」

ジャック「ああ」

コレット「探偵……ホームズ！？」

ジャック『『ジャック』だ。
実は今、ある事件を捜査していて」

コレット「ルパンですか！？」

ジャック「違う！　いいから話を聞け」

コレット「ご、ごめんなさい。探偵って聞いて、ついミステリーオタクの血が……」

ジャック「……まあいい、続けるぞ。
君はセルマン美術館は知っているか？」

コレット「ええ、パリの中央にあるおっきな美術館ですよね」

ジャック「そうだ。
……これは、内密にしてほしいんだが。
その美術館から、一枚の絵画が盗まれた」

コレット「ええっ！？」

ジャック「かつてパリの巨匠と言われたマクシミリアン・ロメールの大作、『ゼウスの歌』。
それが一週間前、展示室から突然消えたんだ」

コレット『『ゼウスの歌』って、超有名なやつじゃないですか！
でも、盗まれたなんてニュースでやってましたっけ？」

ジャック「それが、美術館側が通報しなかったんだ。
警察には何も言わずに、直接うちの事務所に依頼してきた」

コレット「んー？　どうして？」

ジャック「それは……僕にもわからない。館長の意向だそうだ。
というより、館長と一部の人間以外は盗まれたことさえ知らされていないらしい」

コレット「はあ……犯人の目星でもあるんですかね？」

ジャック「怪盗ショコラ」

コレット「ショコラ！」

ジャック「……」

コレット「……すみません。
でも、ショコラって名乗るくらいだから、悪い人じゃないと思うんですけど……。
きっとショコラを愛する素敵な人に違いないわ！」

ジャック「そう考えるのは勝手だが、盗みを犯したことに変わりはない」

コレット「……けど、どうしてそれをわたしに話すんです？　秘密なんでしょう？」

ジャック「ああ。つまりここからが本題だ。
……Un Cygne にあった、絵のことなんだが」

コレット「はい」

ジャック「あの絵はオーナーのものらしいな」

コレット「そうです。お父様……前のオーナーがお客様からいただいたらしくて」

ジャック「僕は……あのオーナーが事件に絡んでいると思っている。
というか、怪盗ショコラの正体は彼なんじゃないかと睨んでいる」

コレット「……探偵さん。わたしのガレット、一口食べます？」

ジャック「いらない。っていうかなんでだ」

コレット「いやあ……糖分が足りてないのかなーと思って」

ジャック「僕は疲れてないし糖分は足りてる。タンパク質もカルシウムも問題ない」

コレット「（笑い交じりに）だってオーナーがその、怪盗……だなんて、そんな」

ジャック「……あの絵……ロメールのタッチにひどく似ていた」

コレット「お店の絵がですか？　……タッチなんてわかるものなんです？」

ジャック「それなりに絵画には精通してるんだよ。

ただ、あの絵はロメールが今までに発表した作品の一覧には存在しない」

コレット「そうなんですか？」

ジャック「ただ、彼には未発表の作品もある。その代表が『ゼウスの歌』だ。
店の絵もそれと同様、彼の隠された作品である可能性が高い。
……そんなものを持っている理由を挙げるとすれば」

コレット「盗んだ……と？」

ジャック「そう考えられる」

コレット「……オーナーは、そんなことをするような人じゃありません。
弟子のわたしがよくわかってます。
それに言いましたけど、お父様がいただいたものなんですよ？」

ジャック「その証拠もないだろう？
とにかく、せっかく得た手がかりなんだ。君には彼とあの絵について調べてほしい。
……さて、それじゃあそろそろ出るか」

コレット「この後、予定でも？」

ジャック「館長に話を聞きに、美術館へ行くことになってるんだ」

コレット「わたしも……わたしも、行きたいです！」

ジャック「は？　どうして君が」

コレット「オーナーの容疑、晴らしたいんです！　弟子の名にかけて！」

ジャック「断る。面倒になりそうだからな」

コレット「……絵が盗まれたこと、うっかり口が滑って誰かに話しちゃいそー」

ジャック「なっ……僕を脅すつもりか？」

コレット「……お願いします、探偵さん。
わたし、オーナーに冤罪で捕まってほしくないんです。
いなくなってほしくないんです。だから……」

ジャック「(溜息) ……わかったよ。
ただ、余計なことは絶対にするんじゃないぞ」

コレット「探偵さん……ありがとうございます！」

コレットN「こうしてわたしは、探偵さんと一緒に、事件を追うことになったのでした」

セルマン美術館、応接室。

オリヴィア「すみません、わざわざ来ていただいて……」

ジャック「いえ、こちらこそ休館日に伺ってしまって」

オリヴィア「貴方がジャックさんですね。私は館長のオリヴィアと申します。
……そちらの方は？」

ジャック「ああ、えっと……」

オリヴィア「可愛らしいお嬢さんですね。探偵さんの助手の方でしょうか？」

コレット「そうです！」

ジャック「(小声で) う・そ・を・つ・く・な」

コレット「えへへ……嬉しくて、つい」

ジャック「(咳払い) ……館長。世間には事件のことを知らせていないそうですが、現在展
示室はどうなっているんです？
絵が飾られていなければ、誰もが不審に思うでしょう？」

オリヴィア「それが……実は、絵は飾ってあるんです」

コレット「えっ？」

ジャック「……どういうことです？」

オリヴィア「ロメールの『ゼウスの歌』は、展示室にきちんと飾られています。
……本物ではありませんが」

ジャック「本物ではない？　つまり、偽物を展示していると？」

オリヴィア「……ええ」

コレット「で、でも、お客さんはその絵を本物だと思って見に来てるんですよね。
だとしたら、それって……」

ジャック「――周囲を騙していることになる」

オリヴィア「……仰る通りです」

コレット「そんな！　それじゃまるで詐欺じゃないですか！」

オリヴィア「今回お願いしたいのは絵画の捜索と、それから……あるオークションの調査です」

ジャック「オークション？」

オリヴィア「ええ。パリの裏通りにあるビルが、オークションハウスになっているんです。
そこで、現在展示している『ゼウスの歌』の贋作を手に入れました。
そのオークションは、『贋作オークション』と言われています」

コレット「贋作……わざと偽物をオークションにかけるってことですか？」

オリヴィア「ええ。『ゼウスの歌』の贋作を作ったのは、最近実力を買われ始めている贋作師だそうです。偽物には到底勿体ないような高額で取引しました。

けれど落札以来、オークション側と一切の連絡が取れなくなってしまったんです。
それに、私は理由なく出入り禁止にされてしまって……」

コレット「謎ですね……」

オリヴィア「お願いです、そのオークションを調べていただけませんか？
もしかしたら、盗まれた本物の絵画が絡んでいるのかも……！」

ジャック「……貴女は、その贋作オークションで本物の『ゼウスの歌』が競売にかけられるのでは、と思ったんですね？」

オリヴィア「ええ」

ジャック「ですが、わざわざ本物を贋作として売り出す理由はないのでは？」

オリヴィア「それは……贋作として出さないと、盗んだ本物だとバレてしまうでしょう」

ジャック「……しかしこちらとしては、贋作を本物だと偽って展示するような犯罪行為をしている方とは、極力関わりたくありません」

コレット「ちょっ、探偵さん……！」

オリヴィア「……貴方がたには、守秘義務があるはずです。
とある方から、そちらの探偵事務所は報酬をお支払いすればどんなことでもしてくださると伺いました。……お分かりかしら」

ジャック「……なるほど。その『とある方』も、そして貴女も、随分とうちのことを舐めているようだ。
ですがまあ、良いでしょう。報酬さえいただけるのでしたら、その依頼、お受けします」

美術館の外。

コレット「なんというか、わたしはどうかと思います。お客さんを騙すなんて……。
それこそ通報したほうが良いような気が」

ジャック「通報するのは絵が見つかってからにすべきだ。
そうしないと、本当に行方がわからなくなってしまいそうだからな。
……じゃ、君とはここでお別れか。短い間だったがご苦労さん」

コレット「次はオークションハウス、ですね？
そういう場所って行ったことないから楽しみだなぁ」

ジャック「……まさか、君……まだついてくるつもりか？」

コレット「当然じゃないですか！
リシャールさんを助けるためなら、たとえ火の中水の中！」

ジャック「……君は、あのオーナーのことが好きなのか？」

コレット「はい、好きですよ」

ジャック「……違う意味のほうか」

オークションハウス。

コレット「あのー……」

ジャック「なんだ」

コレット「勝手に入って大丈夫なんですか……？
黒服の怖い人とか出てきたらどうしよう……」

ジャック「嫌なら帰れ」

コレット「か、帰りません！
……あ、探偵さん。ここから声が聞こえます」

ジャック「あっ、おい、勝手に……！」

ＳＥ：扉を開く、会場ガヤ

コレット「うわぁ……人がいっぱい……」

ジャック「秘密裏のオークションのわりには、けっこう客が入ってるんだな……」

ファクティス「それでは皆様、続いての品に移りましょう。
１８２０年代にフランス中の王侯貴族を虜にした、
アラン・ドラクロワの『薔薇を摘む神父』……その贋作になります」

コレット「本当に贋作を売ってる……ってことは、ここが会場で間違いないですね」

ジャック「館長はここで『ゼウスの歌』の贋作を競り落としたんだったな。
あのオークショニアに何か聞ければ良いんだが……近づくのは難しいか」

ＳＥ：ハンマーを叩く

ファクティス「２５０００！
この品は、そちらのイタリア紳士が２５０００ユーロで落札されました！」

コレット「２５０００！？」

ジャック「馬鹿、声がでかい」

コレット「す、すみません……あまりの額の大きさにびっくりして。
それだけあれば、パリじゅうのショコラを食べ比べできる……」

ジャック「贋作といっても、芸術作品であることに変わりはないからな。
本物だろうが偽物だろうが、人間が作ったものだ。価値がゼロということはない」

コレット「まあ、確かに……」

ジャック「君の試作品のショコラだって、見習いのものとはいえど、ちゃんとしたショコラ

だろう？」

コレット「それはもちろん！
――ん？　あそこにいるのって……」

ジャック「……どうした？」

コレット「あれは……リシャールさんと、カリーネさん……？」

会場の外、廊下。

ジャック「……しかし、君の所のオーナーがまさか会場にいるなんてな。
連れの女性は……常連客といったか？」

コレット「はい、カリーネさんです。でも、どうしてあの二人が……」

ジャック「やっぱり、怪盗はオーナーなんじゃないのか？」

コレット「でも、怪盗さんは美術館にあった本物の絵を盗んだんでしょう？
危険を冒してまで本物を盗む人が、贋作を正々堂々と購入するなんて、目的がわかりません。
それにもしリシャールさんが怪盗さんなら、どうしてカリーネさんと一緒にいるんです？」

ジャック「そのカリーネという女性は何者なんだ？」

コレット「えーっと……実は、わたしもよくわからなくて。
大企業の社長夫人とか、国会議員の奥さんとか……そういう噂が従業員の中でちらほらと」

ジャック「なんだそれ……。まあ、どちらにしろこんな場所に来てるんだ。
オークションのことを何か知っているのは確かだな」

ナタリー「……そこで何をしているの？」

コレット「わああっ」

ジャック「っ……」

ナタリー「貴方たちのようなお子様が来るところじゃないと思うんだけど」

ジャック「……隣のビルに用事があったんですが、間違えてここに来てしまって」

ナタリー「間違えて、ねぇ。
……『ゼウスの歌』は、ここにはないわよ」

コレット「えっ……！？」

ジャック「……なぜそれを」

ナタリー「あの贋作を描いた人、行方不明なんですってね。
最近人気になってきたと思ったら……あれをオークションで落とされて以来、
すっかり音信不通だって」

コレット「音信不通……？」

ジャック『『ゼウスの歌』がなくなったこと、ご存じなんですか」

ナタリー「ちょっと前に、彼の贋作をあのセルマン美術館の館長が落札していたんですもの。
何となくそうだろうなと思ったの。
凄い気迫だったわよ。誰にも譲ってやるもんか、って感じで」

ジャック「……失礼ですが、貴女は？」

ナタリー「ああ、私はナタリー。はじめまして。
そうだ。私、ギャラリーを経営しているの。
もし良かったら、うちに来て話さない？
例の贋作師の話、私の知ってる範囲でなら聞かせてあげる」

ナタリーのギャラリー。

コレット「すごーい、絵がたくさんー！」

ナタリー「ここは、画家たちが卸しにきた絵を飾っているの。
気に入った人がいれば購入してもらっているのよ」

ジャック「あ……あの、窓際の絵は……」

ナタリー「ああ、気づいた？　３００年前に描かれた、『機（はた）織りをする女』っていう絵」

コレット「それ知ってます！　美術の教科書に載ってました！
……でも、どうしてそんな名画がここに？　これも売られているんですか？」

ジャック「……まさか」

ナタリー「そう、贋作よ」

コレット「贋作！？」

ナタリー「オークションで落札した絵を、こうしてここで売っているのよ」

ジャック「贋作を買って、贋作として転売する……ということですか」

ナタリー「そんな感じね」

コレット「でも、そんなこと……」

ナタリー「贋作を贋作として売って、何が悪いの？
美しいものは美しいし、それに魅了される人がいれば、欲しがる人だって大勢いる。何も悪いことなんてないじゃない」

ＳＥ：玄関ドアが開く、ファクティスが入ってくる

ファクティス「やあ、ナタリー。先日の絵画なんだが……おや、先客がいたようですね」

コレット「こんにちは……って……あーーっ！」

ファクティス「……失礼。どこかでお会いしたことが？」

ナタリー「ごきげんよう、ムッシュー。
この子たちとは、さっきオークションで知り合ったの」

ファクティス「それはそれは。楽しんでいただけましたか？」

ジャック「……それより、これはいい機会です。ちょうど貴方と話がしたかった。
僕はジャック。現在、ロメールの『ゼウスの歌』の行方を追っています」

コレット「探偵さん、話しちゃって良いんですか……？」

ジャック「ナタリーさんが知っていたんだ。オークショニアの彼が知らないはずがない。
……何か、心当たりはありませんか」

ファクティス「残念ながら。災難でしたね、盗まれるだなんて。
ですが、館長さんが落札されたあの贋作でも充分なのではないですか？
本物にも劣らない、素晴らしい出来映えでしたよ」

ジャック「オリヴィア館長の出入りが禁じられたようですが、それはなぜなのでしょう？」

ファクティス「さあ……わたくしは主宰とはいえ、お客様一人ひとりのことまではお世話できませんから、そこまでは」

コレット「あのー……わたしからも一ついいですか？」

ファクティス「どうぞ、お嬢さん」

コレット「オークショニアさんは、どうしてこのギャラリーに？
ナタリーさんとはお知り合いなんですか？」

ファクティス「どうぞファクティスとお呼びください。

わたくし自身、絵は好きなんです。ギャラリーや美術館を回れば、目を鍛えることにも繋がりますしね。
彼女とは、ここにたまたま立ち寄ったことがきっかけで、仲良くさせていただいています」

コレット「なるほどなるほど」

ナタリー「ムッシューも、もともと絵を描いていたのよ」

コレット「へえ、凄いです！」

ファクティス「お恥ずかしい。わたくしは所詮、その名のとおりのまがいもの。
本物にはなれなかった。それだけです」

ナタリー「ねえ、ムッシュー。
この子たちね、『ゼウスの歌』の贋作を描いた人の情報が知りたいんですって」

ファクティス「ほう。個人情報ですので詳しくはお話できませんが、そうですね……。
この絵を見ていただけますか？」

コレット「……これ、素敵」

ファクティス「これは、その例の贋作師が描いたオリジナルの絵画です」

コレット「えっ！？　……贋作以外にも描かれるんですね」

ナタリー「この画家は、とても良いものを描くんだけど……オリジナルはどうも売れないのよね。こればかりは運、なのかしら」

コレット「こんなに生き生きとしてて楽しそうな絵なのに……。
わたし、これとっても好きです！」

ナタリー「ふふ……貴女は、見る目があるわ。
そういう考えの人にこそ、本物の芸術に触れる資格がある」

コレット「や、やだなぁ。照れちゃいますよ」

ジャック「これ、作者の名前が書かれていませんが、なぜなんです？」

ナタリー「名前や知名度に作品の価値を左右されたくないって言って、意図的に伏せてるのよ。
いつもパートナーの女性が卸しに来てて、その画家本人の顔は私も見たことがないの」

コレット「へえ……何だか不思議な人ですね。気になってきちゃいました。
でも、名前もわからないしなぁ」

ナタリー「卸しに来る人の名前なら教えられるわよ。
……カリーネっていうの」

ギャラリーの外。

コレット「カリーネさんが、絵を……。
オークション会場にもいましたし、もしかして……」

ジャック「名前を伏せた画家……ね。
そのカリーネという女性が画家本人であるということもありえる」

コレット「ってことは、カリーネさんが『ゼウスの歌』を描いた贋作師ってことですか？」

ジャック「彼女はオークション会場にも姿を見せていた。
その可能性は充分にあるな」

コレット「……もし、カリーネさんがその贋作師だったとしたら。
一緒にいたリシャールさんは……」

ジャック「コレット……」

コレット「本当に、怪盗さんの正体は……リシャールさん、なんでしょうか」

帰り道。

ＳＥ：足音

コレットＮ「カリーネさんが贋作師で、リシャールさんが怪盗ショコラ……。
信じたくはありませんでした。
リシャールさんが悪いことをする人には到底思えませんし、カリーネさんが贋作師というのもしっくりこないといいますか……。
それになぜお二人が一緒にいたのかもわかりません。確かに仲がよろしいとは思いますが……」

ギャラリー内。

ナタリー「ねえ……まだこんなこと、続けるつもり？」

ファクティス「ん？　ああ……俺は、彼の気が済むまで付き合いたいと思ってる」

ナタリー「……私は、あの子を救ってあげなきゃいけない。
でも、傷つけたいわけじゃないの」

ファクティス「……わかってる。俺はただ――あいつに、謝りたいだけなんだ」

ギャラリー外。

コレット「……聞いてしまった……」

翌日。喫茶店。

ジャック「ファクティスさんとナタリーさんの会話？」

コレット「はい。『彼の気が済むまで付き合う』だとか、『あの子を救ってあげなきゃいけない』だとか。
あ、それからファクティスさん、『あいつに謝りたい』って言ってました」

ジャック「あの子とかあいつとか、よりによって名前を口にしないとは……」

コレット「警戒していたんですかね？」

ジャック「もしかして、君の盗み聞きがバレていたんじゃないのか？」

コレット「盗み聞きじゃないです！　ギャラリーにハンカチ忘れて戻ったらたまたま聞いちゃったんです！
不可抗力的な盗み聞きです！」

ジャック「どっちにしろ盗み聞きじゃないか……。
あ、ほら。パンケーキ来たぞ」

コレット「わー、ありがとうございます！　美味しそー！」

ジャック「まったく、奢りだからってたくさんトッピング追加しやがって……」

コレット「いつもだったら、癖で常に節約を意識しちゃうんです。
でも、人のお金で食べるご飯は美味しいよって、リシャールさんが教えてくれて」

ジャック「あのオーナー……」

コレット「ああ、美味しい……。
そういえば探偵さんって、どうして探偵さんになったんですか？
もしかして、明智小五郎に憧れてたとか？」

ジャック「あけ……誰だそれは。
……僕は、祖父のことが知りたかったんだ。それで今の事務所に入った」

コレット「おじいさまのこと……？」

ジャック「ああ。僕は、祖父のことが大好きだった。
だが、小さい頃に急病で亡くなってしまって……。
２年前、父から祖父について話を聞いてね。
祖父の病の原因となった出来事が……あ、いや。これ以上は話すものじゃないな。
すまない」

コレット「……すみませんでした。小五郎がどうとか無神経なこと言ってしまって」

ジャック「いや、それは別に……。
……だが、どうして君にこうぺらぺら喋ってしまったのか、まったくもって謎だな」

コレット「（ドヤ顔で）探偵さんにも解けない謎、ってやつですか？」

ジャック「上手いこと言ったなとでも言うと思ったか。
……君は、どうしてショコラティエールになりたいんだ」

コレット「……うち、貧乏で。ショコラが最高の御馳走だったんです。
それでショコラを作る人になったら、ご馳走もいっぱいになるなーって思って」

ジャック「真剣なようでふわっとした理由だな……」

コレット「つまりショコラが好きだから、ですかね！」

ジャック「（苦笑して）……まあ、君らしくて良いんじゃないか」

コレット「うふふ」

Un Cygne。

カリーネ「コレットちゃん、マンディアンとアマンド・ショコラを二つずついただける？」

コレット「はーい」

コレットN「あれからしばらくして、わたしは捜査よりも仕事に打ち込んでいました。
試作品の制作やバレンタインショコラの案を練るのに時間を追われていたのです。
気がつけば、壁の絵のことすらすっかり忘れてしまっていました」

ＳＥ：ドアが開く、ジャックが入ってくる

コレット「いらっしゃいま……あ、探偵さ……」

ジャック「（咳払い）……コレット、少しいいか？」

コレット「は、はい」

ＳＥ：ジャックに駆け寄るコレット

コレット「どうしたんですか？」

ジャック「贋作オークションの存在が、どうやらマスコミに流れたらしい」

コレット「……えっ！？」

ジャック「こうなると、『ゼウスの歌』の贋作の話が出回るのも時間の問題だ。
オーナーとカリーネさんから目を離さないでくれ」

コレット「っ……わかり、ました」

ＳＥ：カリーネが近寄ってくる

カリーネ「あらあらコレットちゃん。彼、もしかして恋人？
恋愛には疎いほうだと思ってたのに、なかなか隅に置けないわねぇ」

コレット「ち、違います……！」

ＳＥ：リシャールの足音

リシャール「コレットにもついに春が来たんですねぇ」

コレット「オーナーまで……もう……！」

リシャール「お久しぶりです、ジャックさん。
うちのコレットがお世話になっているようで……仲良くしてくださってありがとうございます」

ジャック「……いえ、別に」

リシャール「良かったらショコラを……あ、甘いものは苦手でしたね。
ビターショコラのラスクがありますが、召し上がっていかれませんか？」

コレット『省略したら『ビターショコラスク』ですね！」

ジャック「……何も聞かなかったことにするよ」

リシャール「ふふっ……ビターショコラスク……良いですね……」

ジャック「ツボったのかよ……！」

カリーネ「商品名にする？」

コレット「良いですね！」

ジャック「絶対やめとけ」

コレット「あっ、いけない。カリーネさんのショコラ詰めてる最中でした」

カリーネ「あらあら、そうだったわ。ちょっと失礼」

ＳＥ：去るコレットとカリーネ

ジャック「……訊いても良いですか」

リシャール「ええ、どうぞ」

ジャック「貴方は、あの絵画をどうやって手に入れたんです」

リシャール「……先代である私の父が、当時よく店に来てくださっていたお客様からいただきました。
決して有名というわけではありませんでしたが……父はその画家の絵がとても好きでした」

ジャック「……リシャールさん。この絵は、マクシミリアン・ロメールのタッチにとてもよく似ている。そうは思いませんか」

リシャール「……本当にそう思われるのですか？
私には、『彼』自身の癖や好みが存分に表現された絵に思えます。
もちろん、直接お会いしたことはありませんけどね」

ジャック「……もしかして」

リシャール「これは、ただ一人の人間が、自身の存在を証明するために描いた、一羽の白鳥の絵です。
本物か偽物かなんて、この絵に至っては関係ありません」

ジャック「そういうことでしたか……。
この絵に、もっと早く出会いたかった」

リシャール「遅くなってしまって申し訳ない。
……迷惑ついでに、もう一つお願いしてもよろしいですか」

ジャック「何でしょう」

リシャール「コレットを、よろしくお願いします。事件に首を突っ込んでいるんでしょう？」

ジャック「……あいつは、よくわからないです。
真っ直ぐで、のんきで。貴方のためにと、ずっと走りっぱなしでしたよ」

リシャール「それはそれは、嬉しい限りですね。
……コレットはね、陽気に振る舞ってはいるけれど、なかなか苦労してきたん

ですよ。
だから目の前のことに人一倍、一生懸命なんだろうな。
……そういうの、見ていて時々、羨ましくなる」

ジャック「……そう、ですね」

リシャール「辛気臭い話をしてしまいましたね。すみません」

ジャック「いえ。
……そういえばオーナー。僕、貴方に名前を言いましたっけ」

夜、閉店後。

コレット「……よし、これで食器は完璧。
片付けと戸締りを任せられるようになるなんて、弟子としての信頼度が上がったのかも！　あとは……」

ＳＥ：コレットの足音

コレットＮ「あの絵を調べるとしたら、今日が絶好のチャンスです。
リシャールさんがいないときにこっそり拝借するのは少し罪悪感がありますが、これもリシャールさんの容疑を晴らすため……！」

ＳＥ：壁から絵を外す

コレット「うーん、特に変わったところはないけど……。
それにしても、白鳥の絵だなんて、いかにもこのお店のために描かれたものみたい……。
――ん？」

コレットＮ「裏面を見たわたしは、しばらくその場から動けませんでした。
そこには、その絵を描いたと思われる画家のサインが記されていたのです……」

ＳＥ：裏口に出て鍵をかける

ジャック「コレット」

コレット「わっ……！　探偵さん、どうしてここに？　とっくに帰られたはずじゃ……」

ジャック「君一人じゃ心配だったんだ。……送ってやる」

コレット「え……？」

ジャック「行かないのか？」

コレット「い、いえ、ありがとうございます。でも、どうして……」

ジャック「……ちょっと待て。今、視線を感じた気がする」

コレット「……視線、ですか？　わたしにはわかりませんでしたけど……」

ジャック「ちょっとここで待ってろ。動くんじゃないぞ」

ＳＥ：ジャック、去る

コレット「えっ、ちょ……行っちゃった。
ここで待ってろって言われても……」

ＳＥ：コレット、こっそり追いかける

コレット「ミステリーオタクとしては、こういった状況には積極的に突っ込んでいきたいわけで……」

ＳＥ：遠くから車の走行音

コレット「ん……？　あの車、なんかこっちに向かってきてるような……」

ＳＥ：車が勢いをつけて走ってくる

コレット「え？　う、嘘、わたし……！？」

ジャック「危ない！」

ＳＥ：走り出すジャック、コレットの腕を掴んで路地に逃げ込む。走り去る車

コレット「はー……死ぬかと思った」

ジャック「こっの……馬鹿コレット！　ここにいろって言っただろ！
何かあったらどうするつもりだったんだよ！」

コレット「ご、ごめんなさい……。
わたしが突っ込むはずが、車に突っ込まれて……」

ジャック「冗談言ってる場合か！　……怪我は？」

コレット「大丈夫……です」

ジャック「（溜息）……良かった。
……だが、これではっきりしたな」

コレット「な、何がですか？」

ジャック「……こっちの話だ。行くぞ」

コレット「あ、ちょ、ちょっと……！」

コレットの部屋。

コレット「……あの絵のこと、やっぱり探偵さんにちゃんと言わなきゃ……。
でも、いまいちパズルのピースがはまらないっていうか……うーん、こんがらがってきたー……」

ＳＥ：着信音

コレット「ん？　こんな夜中にいったい誰……あっ、リシャールさん」

ＳＥ：電話に出る

コレット「はい」

リシャール「こんばんは。すみません、こんな時間に。
今日は貴女に戸締りを任せてしまって……一人で大変だったでしょう。
ありがとうございました」

コレット「ああ、いえ……！　リシャールさんのお役に立てて嬉しかったです」

リシャール「貴女が弟子入りを申し込みに来てから、もう一年が経ちました。
最初はどうなるかと思いましたが、今ではすっかり、自慢の弟子です」

コレット「リシャールさん……。
……あ、あの。わたし、リシャールさんに訊きたいことがあって。
贋作オークションの会場に、カリーネさんと一緒に……いましたよね？」

リシャール「……ええ」

コレット「っ……『ゼウスの歌』についても、ご存じだったんですか」

リシャール「……それは言えません。
そういえばギリシャ神話では、ゼウスが白鳥に姿を変えてレダに近づいたそうですよ。
何というか、皮肉なものですね」

コレット「ゼウス……白鳥……。それってもしかして……！」

リシャール「……では、私はこれで。
また明日、元気な顔を見せてくださいね。おやすみなさい、コレット」

オークションハウス。

ＳＥ：会場の扉を開く

コレット「っ、探偵さん……！」

ジャック「なっ、コレット……どうしてここにいる！」

コレット「そ、そ、それより何ですかその銃は！　危ないですよ！」

オリヴィア「……そうよ。どうせ貴方には撃てやしないわ」

ジャック「黙れ。……僕は、お前に復讐するために今日までやってきたんだ」

コレット「……Un Cygne に飾ってある絵画。
あれは、探偵さんのおじいさまが描かれたものなんですよね」

ジャック「そうだ。……生前、祖父はマクシミリアン・ロメールの弟子だった。
ロメールは怪我で腕が使えなくなったあと、代わりに祖父に描かせるようになった。
やがてそのロメールが亡くなり、祖父は自身の名で絵を発表したが、ロメールの模倣に過ぎないと言われてまったく評価されなかった」

コレット「そこで描いたのが、『ゼウスの歌』なんですね」

ジャック「ああ。セルマン美術館の前の館長は、祖父の名で美術館に展示をするという約束で、発表前の『ゼウスの歌』を買い取った。
しかし実際に展示されると、祖父の名ではなくロメールの名が刻まれていたんだ。
彼の隠された遺作として、絵は注目を浴びた。
それで祖父はショックのあまり、病に倒れて亡くなった」

オリヴィア「……可哀想だわ、本当に。父は彼に悪いことをした」

コレット「そう思ってるなら、どうして……！」

オリヴィア「……私が跡を継いだあと、『ゼウスの歌』がロメールの作品ではないことを知ったわ。
でも、今更取り下げるなんてできなかった。
あの絵がロメールのものでないと世間に知られたら、絵の価値は一気に下がってしまう」

コレット「そんなことない……！　だってあの絵は、皆が称賛していたじゃないですか」

オリヴィア「どんな絵かというよりも、誰が描いたかが重要なのよ。
上手くても売れない画家は大勢いる。
……名前ってね、ブランドなの」

ジャック「そんなことのために、祖父の努力を踏みにじったのか！」

オリヴィア「美術館を潰すわけにはいかないの！
２ヶ月前に父の跡を継ぐことになった時、周囲はみんな反対したわ。
若すぎる、頼りないって。
ここで駄目になったら、私は……！」

ジャック「……コレットを狙った理由も、それか」

オリヴィア「あれは警告よ。これ以上余計なことをされないように」

ジャック「勘違いしているようだが、オークションの話をマスコミに流したのは僕たちじゃない」

オリヴィア「嘘言わないで。貴方たちじゃないなら、いったい誰だっていうのよ……！」

ファクティス「――貴女の友人だよ」

コレット「ファクティスさん……！」

ＳＥ：ファクティスの足音

ファクティス「ギャラリーを経営している貴女の友人から、貴女を止めてほしいと頼まれました」

オリヴィア「ギャラリー……ナタリーね」

コレット「じゃあ、ナタリーさんが『救ってあげなきゃ』って言ってたのは……」

ファクティス「やっぱり聞いていたんですね……そう、彼女のことです。
真実を隠そうと決めたオリヴィアさんを止めてあげられなかったと、彼女はとても悔やんでいました」

オリヴィア「ファクティス、貴方やはり裏切ったのね！
探偵に嗅ぎまわせれば大人しくなると思ったのに、まさか繋がっていただなんて……」

ファクティス「あの探偵事務所を紹介したのはわたくしですよ？
油断したのはどっちですか」

オリヴィア「くっ……貴方の目的は何なの？
貴方、お金さえ手に入れば何でも協力するって言ったじゃない！」

コレット「ファクティスさん。貴方と最初にお会いした時、『ゼウスの歌』は盗まれたと仰っていましたが、わたしも探偵さんもそんなことはお話ししていないんです。
盗まれたとわたしたち以外に知っているのは、怪盗ショコラとその協力者くらいしかいない」

オリヴィア「協力者？」

ファクティス「……わたくしの祖父の名は……マクシミリアン・ロメール」

オリヴィア「え……！？」

ファクティス「わたくしは、祖父のしたことを許せませんでした。
表現者としてあるまじき行為をしたと思っています。
ですから、そこの探偵さんに協力したかった。
祖父の代わりに謝りたかったんです」

コレット「そもそも『ゼウスの歌』は、シモンさん……探偵さんのおじいさまからのメッセージだったんです。
ゼウスはギリシャ神話で白鳥に化けて、女性に近づいた。
芸術家の最期の作品を、『白鳥の歌』と表現することがあります。
おそらくシモンさんは、今までの師匠と自分の状況を、最後にその作品を通して伝えたかったんです。Un Cygne に贈った絵画と一緒に」

ジャック「……僕は当初、本物が消えて贋作を展示していることが明るみになれば、それで良かった。
Un Cygne であの絵を見つけたときは驚いたよ。僕が知らない祖父の絵があったんだからな、それも白鳥の。
……コレット。今まで君を利用して、すまなかった」

コレット「いいんです。
——怪盗ショコラの正体は……貴方ですね。探偵さん」

Un Cygne。

カリーネ「……今頃、全部解決してるかしらね」

リシャール「そうだね」

カリーネ「それにしても、どうして探偵くんに教えなかったの？
お父上がいただいた絵のこと」

リシャール「自分で気づいてほしかったんだ。
あの絵を見て、彼はロメールが描いたものだと思ったらしくてね。
『ゼウスの歌』に関しては、父から聞いていたけど……最初に全部話してしまっては、彼が探偵になった意味がないから。
君の旦那さんがうちの事務所を館長に紹介してくれたから、すべて上手くいったよ」

カリーネ「貴方は、彼の復讐を手伝いたかったの？」

リシャール「……まあ、間接的にそうなってしまったね。
私は、君たちの力になりたかったんだ。……大事な友人だから」

カリーネ「本当の芸術の価値なんて、人にはわからないのよ。
みんな肩書きに憑りつかれているだけ。
評論家気取りの生産性のない人間なんて、一生黙っていればいいのに」

リシャール「ふふ。君のそんな一面をコレットが見たら、驚くだろうなぁ」

カリーネ「あらやだ。私は常連の優しいおねえさんだと思われていたいわ。
……私は、彼を支えたかった。
彼がやりたいと思うなら、それが何であろうと私は否定したくない。
ただ……ファクティスだなんていう偽名は、彼には似合わないわ。
だって、彼がどんな絵を描こうと、彼自身は本物、だもの。
贋作を作るのは、もうやめるでしょうね」

リシャール「……彼に君を任せて、正解だった気がするよ」

カリーネ「……また、貴方に助けられちゃったわね」

リシャール「いいさ。ずっとうちのショコラを好きでいてくれれば。
カリーネ……幸せになりなよ」

カリーネ「……ありがとう。リシャール」

ＳＥ：リシャールの足音。絵に触れる

リシャール「道楽で始めたはずのこの店も、いつの間にか随分と愛されてしまったね――父さん」

後日、Un Cygne。

リシャール「はーい、できたて熱々のフォンダン・ショコラですよー！」

コレットN「あれからすぐに、『ゼウスの歌』を描いた本当の画家がシモンさんだということが公表されました。
例のオークションハウスは、警察が捜査で立ち入った時にはすでにもぬけの殻だったそうです。
探偵さんは姿を消して、あの日以来一度も会っていません。
わたしはというと、現在もUn Cygneで修行の真っ最中です。
そうだ、変わったことといえば……」

コレット「オーナー。バレンタインのショコラ、追加分できました」

リシャール「ありがとうございます。
コレットのおかげで、とてもUn Cygneらしいショコラになりました。
お客様にも好評ですよ」

コレット「わたし、この間の一件で学んだんです。『らしさ』って大事だなって。
偽物とか本物とか、知名度がどうとかじゃなくて、えーっと、つまり、そう……
自分色を出す！　みたいな！」

リシャール「ふふ。その考えが、コレット『らしさ』ですね。
……『ゼウスの歌』のことが解決して、ジャックさんのおじいさまも喜んでくださっていると良いのですが」

コレット「きっと大丈夫です。
シモンさんの想いは、ちゃんと届きましたから」

リシャール「……ええ、そうですね。
コレット。一度、売り場を代わっていただいても良いですか？
ラッピング用のリボンを補充してきます」

コレット「はい」

ＳＥ：リシャール、去る

コレット「えへへ、オーナーに褒められちゃった。
……よしっ、今日も頑張るぞー！」

ＳＥ：ドア開く、ドアベル

コレット「……あっ……！」

ＳＥ：足音

ジャック「やあ。君の自慢のショコラを一つ、貰おうか」

コレット「いらっしゃいませ――ジャックさん」

コレットＮ「――それはきっと、心優しい怪盗がくれた、バレンタインの贈り物」

コレット「そういえば、どうしても一つ訊きたいことがあったんです」

ジャック「なんだ」

コレット「どうして『怪盗ショコラ』って名前にしたんですか？」

ジャック「……どうしてだと思う？」

コレット「甘いものが苦手って言っておいて、実はショコラが大好きとか！？」

ジャック「ふっ……まあ、そう考えるのが妥当だろうな。

『ミステリーオタク』のレベルでは」

ＦＩＮ